

性別や年齢の固定観念とらわれず

園児・保育士の個を尊重

子どもの性別に応じて「男の子なんだから泣かない」などと声をかけたり、しかったりすると子の可能性を狭めてしまいかねない。ジェンダーと子育てについて取材した際にそのような話を聞いた記者は、男児2人の親として、具体的にどう育てていけばよいのか悩んだ。ヒントを得ようと男性保育士の比率が高い認定こども園で話を聞いた。

(安藤美由紀)

東京都新宿区の認定こども園「新宿せいが子ども園」は、ゼロ〜5歳児約140人が通う大きな園だ。各階は大きなワンルームになっていて、園児たちはそれぞれ好きな遊びに没頭している。絵本を読む子、おもちゃで遊ぶ子。園児が自由に動くのを保育士らが見守る。

一見、記者の子どもたちが通った園と同じようだが、大人の職員の動きは違

った。室内や園庭での見守り、配膳、事務。あらゆる場で、男女がともに作業に当たっていたのだ。

こども家庭庁の「保育士登録者数等(男女別)」によると、2024年4月1日現在で、保育士の男性比率は5.2%。同園は40人のうち男性が17人と4割超を占め、男女ともに見守りができるのは同園ならでは



工作する子どもたちを見守る保育士＝東京都新宿区の新宿せいが子ども園で

男性職員が4割の園 自主性や多様性を大切に

の特徴だ。ここが3カ所目の勤務という保育士歴16年の女性(36)は「男性だけ、女性だけの方が不自然。より家庭や社会に近い環境になって、子どもにとっても良い」と話す。

見た目で判断せず

園の方針は、見た目で判断しないこと。例えば、力仕事があるときは「力に自信がある人、来て」と声をかける。「結果として男性保育士ばかりになることもありすがね」と藤森平司園長。性別などの固定観念にとらわれず、個人の特性を尊重して協力する大人たちの姿を通し、園児らにも多様性の大切さを伝えられると考える。

担任を持たず、フリーの保育士として全体を見守る小林純平さん(41)が強調する点はもう一つあり「年齢で分けないことも重視している」。3〜5歳児は年齢ごとに分かれず、基本的に一緒に過ごす。

同園では朝、散歩や外遊び、工作など、その日にしたい活動や食事の場所などを園児自身に選ばせる。自主的な行動を促すためだ。

が役割。小林さんは「おもちゃなら、複数人で遊ぶカードゲームなどを置いておく」と、一人遊びではなくみんなと関わり合って遊ぶようになる」と説明する。

年長児がリーダーになることを期待する雰囲気はない。以前、藤森園長が「年長さん、しっかりして」と声をかけると、園児から「年長だからって、しっかりしてなきゃいけないの」と返されたという。

保護者からも支持

こうした方針は、保護者からも支持されている。5歳児を通わせる海老原晴香さん(44)は、自分が通っていた幼稚園と比べ「この園には『こうあるべきだ』がない」と話す。保育士らはそろいのエプロンなどを着用せず、私服姿。大人の個も尊重されていると感じられるそう。

子どもの性別を前提にせず、関心や行動を見守る同園の実践について、ジェンダーを研究する堀川修平・埼玉大ダイバーシティ推進センター特定プロジェクト研究員は「『男らしさ』『女らしさ』は、社会や文化の中で身につくもの」と指摘。「幼い頃からその子の属性ではなく、個々の特徴やニーズが大切にされる